

教育史における J.F.Oberlin (オベリン)

ーフランス革命以前の教育体制の視点からー

海 津 淳

キーワード：J.F.Oberlin (オベリン)、中世の学校教育、キリスト教会の教育管掌、フランスにおける「小さい学校」、ラ・サール

序

J.F.Oberlin¹ (オベリン、以下オベリンと表記) がその任地であるフランス、アルザスのバン・ドゥ・ラ・ロッシュ地方で住民の貧困の解消わけでもその一環としての教育に生涯を捧げたのは、ルイ 15 世からルイ 16 世の治世を経て大革命の激動にフランスのみならずヨーロッパ全土が大きく揺り動かされた時代であった。

そうした中で彼は一貫して教区住民の教育に尽力し、その教育実践は教育制度確立以前の一寒村における実績として驚くべき近代性を有している。彼が実施した幼児教育機関の創設、教育義務化、実物教育、授業科目の拡充、共同体単位の公共学校設置、教員の養成等、これらはフランスという国家でさえ革命後ほぼ一世紀をかけて漸次的に実現し得たものである。人文・自然科学の広範な知識を取得し、啓蒙思想が世を席卷する中、ルソーはじめ最新の思想も積極的に吸収したオベリンの教育に「近代性」を探ることは無論意義深い主題²である。あるいは彼と直接・間接に交流のあった敬虔主義教育者フランケの後継者たち、およびペスタロッチ、バゼドウら汎愛派との関連も論ぜられるべき重要な領域ではあるが、本稿では、彼の教育を革命以前のフランスにおける学校制度の歴史のなかで位置付け、その特質を探ることに焦点をあてる。

1. 西ヨーロッパおよび中世フランスと「学校」

1) 古代から中世への移行期における様相

ここでまず、西ヨーロッパにおける教育、特に「学校」についてその歴史を概観したい。西ヨーロッパという世界自体は、西ローマ帝国の崩壊（476 年）の後、その版図の地中海北岸に形成された社会的・文化的領域ということができよう。西ローマ滅亡の一因を成したゲルマン諸族は、東・西のゴート王国、ヴァンダル王国等、帝国領内に次々と国家を建設するがその興亡は激しく、最終的にこの地に新しい基礎を築くのはフランク王国

であった。そしてカロリング朝に至り、シャルルマーニュカール大帝－Charlemagne(位768-814)の意志に基づく国家的・文化的発展は周知のとおりである。

この新しい「ヨーロッパ」という世界における大きな特質のひとつは、古典古代に対する崇敬とその継承であろう。とりわけ西ローマ帝国滅亡からヨーロッパ世界形成への移行期、ゲルマン諸族にとってはローマの政治・行政機構から文化に至るまでが、即時に導入すべき、かつそれが可能な優れた遺産であった。実際のところ壊滅的な破壊行為や戦乱によって滅亡したのではない西ローマの、未だ健在な元老院階級出身者はしばしばゲルマン国家に政府高官・顧問として登用されており、ローマ人ボエティウス Anicius Manlius Severinus Boethius (480 頃 -524 頃) やカッシオドルス Flavius Magnus Aurelius Cassiodorus Senator (485 頃 -580/582) と東ゴート国王テオドリック Theodoric (位471-526) との関係にその好例を求めることができる³。

こうした状況は学問および教育の分野においても同様である。先述のカッシオドルスは、東ゴート国王に仕えたが、引退して後、イタリアのスキュラケウムにウィウアリウムともう一つの修道院を建設し、これがヨーロッパ黎明期の聖書研究と教育の重要な拠点となるのである。彼はキリスト教に関する研究と教育を目的としつつも、ここで同時にローマの「古典古代の」「自由学芸」を教育課程として導入するのである。その方法は『綱要』*Institutiones; Institutiones divinarum et humanarum lectionum; Institutiones divinarum et saecularium literarum*⁴に記されており、聖書研究を第一の目的としながらも、世俗の教養、すなわちギリシア・ローマ起源の自由学芸七科をそれに奉仕する学問として研究・教育課程に組み入れることを推奨する。さらに彼は、おそらくそのままでは何れ散逸の難を免れ得ない古典写本の数々を、彼の修道院に蒐集・保管することに専心した。

このカッシオドルスの修道院での活動は、中世初期における教育と学問の核心たる修道院の姿、さらにはヨーロッパの伝統的学問・教育の構造を象徴するものである。学問・教育の分野では、帝国の崩壊とともに消滅してゆく古代ローマの学校に代わり、修道院における聖職者養成のための付属学校が、過渡期的混乱の収まらぬ当時の社会における唯一ともいえる重要な研究・教育機関として屹立する。ここでラテン語・聖書・歌唱という修道士として必要な技術と知識を修得するのであるが、ウィウアリウムに見るように修道院には貴重な書籍を保管する図書室が付設され、写字が彼らの重要な仕事となり貴重な写本が製作された。そのなかで「キリスト教」を学ぶ際の土台として「自由学芸」が供に教授されたのである。無論カッシオドルスの時代から、厳格な宗教者たちはこうした古典古代の「異教的」学芸を頑として拒み続けた。

こうして4世紀以降ローマ帝国によって公認、国家宗教化されたキリスト教とその組織がローマの瓦解とその後の混乱を生き抜き、新たに確立したヨーロッパ世界において社会の支柱的役割を担ってゆく。と同時に、キリスト教以前に成立した古典古代の文化・システムは、この社会のもう一つの水脈として可視的・不可視的に機能し続ける。学問・教育の領域もまたその例外ではなかったのである⁵。

2) 中世の教育と学校

新興諸国家の混迷の中でも徐々に力を蓄えていったカロリング朝フランク王国は、カール大帝の即位によってその地歩を確かなものとする。カロリングの祖ピピンがその篡奪した王位を教皇によって是認され、シャルルマーニュは同様にレオ3世教皇により神聖ローマ皇帝の冠を授けられる。それはすなわち、古代ローマから継承される権威によるフランクの正統性の保証であり、同時にペテロの後継者にとってのロンゴバルトの脅威からの保障であった。

こうした中世ヨーロッパの聖俗の協調体制の確立の上に、いわゆるカロリング・ルネサンスが花開く。カール大帝の文教政策はつとに有名であるが、彼は教育・学校に関しても興味深い布告を行っている。大帝は司教に向け、「奴隸」と「自由人」の子供のための学校を開設すること、すなわち修道院または司教の館において『詩編』、音符、歌唱、教会暦の算定方法、文法、筆写を教授することを勧告している⁶。

P. リシェは中世ヨーロッパの教育に関して、この領域の主要著書である *Écoles et enseignement dans le Haut Moyen Age, fin du V^e siècle- milieu XI^e siècle* で詳細に論述しているが、前述のカール大帝の布告に象徴されるように中世においてはキリスト教会による教育が支配的かつ基本的な位置を占め、これが一オペリンの時代も包括しー 長きに亘ってヨーロッパ教育体制の磐石の礎となつてゆくのである。そしてリシェの挙げる中世における主要な三教育機関、「修道院付属学校」、「司教座聖堂付属学校」、「司祭学校」の制度と⁷、同機関における授業科目、教育理念もまたその後のヨーロッパの「教育」のありかたに強い影響を及ぼし続けてゆく。これらの学校は、後に世俗の希望者も受け入れることになるとはいえ、第一義的にはその名の示すとおり宗教上の任にあたる聖職者を養成するための機関である。従つてそこでは典礼に必要なラテン語、聖書と宗教の知識、歌唱などが教授され、少なからぬ場合、それとともに文法をはじめとする古典古代の自由学芸が「神の学問」を補う手段として教授・研究されたのであった。

ところで当時のヨーロッパの歴史的事象を把握する際に、留意すべき点は聖職者の社会的役割とその地位であろう。古代ローマ末期にキリスト教が国教化されて以来、宗教的指導者たる司教職は往々にして元老院階級に代表される行政能力を有す貴族層から選出されたが、ゲルマン諸国家によってその新たな支配体制が確立した後のヨーロッパにおいても、それに変わりはない。そしてヨーロッパの主要な都市自体、その少なからぬものがローマ時代の司教座都市に起源を持っている。

これについてはリシェの記述から引用しておきたい。リシェは、ゲルマニアの王たちが貴族との抗争の中で司教の支持を獲得するために、司教たちに都市の管理を委ね、その結果彼らが都市の政治・行政を担い、彼らのもとで教育された有能な聖職者は都市や王宮の重要なポストを占めたことを記述している⁸。この関係は、数世紀後のブルボン朝のリシュリュー Armand Jean du Plessis, cardinal et duc de Richelieu (1585-1642) やマザラン Jules Mazarin (1602-1661) といった高位聖職者の政治的地位に、その端的な例を確認

することができるであろう。

3) 都市の発展と大学の成立

初期中世における修道院が学問・教育のみならず文化の中心であったことは、衆目の一致するところである。しかし社会情勢の安定化、商業・産業の発達等による都市の発展に伴い、次第にその中心はこちらに移行し多様な文化を創生してゆく。教育においても、司教座聖堂附属学校を中心に私塾的な学校も現れ、例えばアベラルドゥス Petrus Abaelardus (1079-1142) のような高名な教師を求めて学生たちが都市に謂集し、従来とは異なるダイナミックな思潮が誕生していった。

都市の代表的教育機関である司教座聖堂附属学校について、Ph.アリエスは「西欧のすべての教育体系の起源はここにあった。⁹⁾」と喝破する。その科目構成についても、無論聖職者養成が主眼の教育機関であるが故に、また彼によればこの学校が聖歌隊養成所としての性格を有していたが故に、『詩編』と聖歌を中心に教授された。そしてここに古典教養としての自由学芸が明確に導入され、最後に聖書、教会法などを学ぶ神学がその教程を完成させるのである。加えて次第に司教座以外の教会に付属する学校や私塾による授業も増加し、俗人による教育も行われるようになると、都市の教育を管掌する司教座聖堂参事会はそれに反発を示すようになる。こうした状況において彼らに対抗し自らの権利を守ろうとする教師と学生の動きが齎したものが「大学」の形成であった¹⁰⁾。

よく知られるとおり大学は、ギルド同様、学生と教師による一種の同業組合として発足した。従って当時の大学は、授業の実施される教室は個々の教師が賃借した一部屋であったり、教師と上級学生の区分も曖昧でその様相は千差万別であったが、パリでは1452年の教皇庁による大学改革が行われ、それ以降、「学寮」collegium, collège¹¹⁾という組織が大学における基礎科目である「自由学芸」すなわち文法・論理学・修辞学および数学・幾何学・音楽・天文学の「自由七科」を担当する体制が形成されることとなる。そしてこの「自由学芸」の修得の後、神学、法学、医学などの上級学部に進むという教程がヨーロッパにおける大学の基本として確立し、それは多少の変容こそあれ現代に継承される大学課程の基本的枠組みとなることは周知の如くである。

2. 「小さい学校」petite école — 16世紀以降のフランスにおける新しい教育体制

1) 教育修道会と「学院」collège

16世紀ドイツに端を発する宗教改革の動きは、言うまでもなく全ヨーロッパに大きな影響を及ぼした。この事件はカトリックの視点からは教会の分裂であったが、しかしながら彼らも自らの刷新において手をこまねいていた訳ではなかった。トレントの公会議において様々な決定がなされ、イエズス会に代表される組織的な対抗改革運動が展開し、教育の分野でもこれに伴い新しい動きが生まれてゆく。

第一に、そのイエズス会やオラトリオ会といった修道会による教育機関として、フランスにおいて確固たる地位を築いた「学院」collègeがある。ここでは厳格な規則のもと、中世の学校との大きな相違である年齢に対応した学級（学年）システムに基き段階に従った文法・自由学芸の授業が実施された。高度に組織化されたこれらの学院はアリエスが述べるように聖職者のみならず全ての階層に解放され、特に上層市民階級の多大な支持を獲得して、後世に継承される本質的教育制度として定着してゆくこととなる¹²。

1558年、クレルモン司教に任ぜられたイエズス会士デュプラ Guillaum Duprat がピヨムにおいてフランス最初のイエズス会の「学院」を設立するが、その後1564年のクレルモンをはじめ主要都市に次々とこの種の学院が開設され、1629年には同会の72の機関中58の「学院」が、さらに1762年に至っては90の「学院」を含む160のイエズス会諸機関が存在した。このようにフランスで活躍した教育修道会として、イエズス会以外にもベリユール Pierre de Bérulle (1575-1629) が創設したオラトリオ会 L'Oratoire de Jésus et de Marie immaculée (イタリアのネリ Philipo Neri のオラトリオ会を手本とする)、1598年に修道会となったビュス César de Bus (1544-1606) のキリスト教教義協会 La Doctrine Chrétienne を挙げられよう¹³。

こうした「学院」の目覚ましい興隆は、ラテン語教育が聖職者以外にもラテン語文書を必要とする司法官、行政官を志す階層の需要に呼応したことが大きな要因であることは疑いない。中世以来の伝統の上に形成されたこの教育機関は、科目・内容面ではそれを継承しつつも、授業形態（クラスの設置）・受講者層（非聖職者）とその目的において学校教育の全く新しい局面を提示するのであった。

2) 「小さい学校」 petite école

他方、16世紀末から17世紀に至り、フランス各地に「小さい学校」petite école と呼ばれる学校が現れ始める。言うまでもなく明確な国家的制度に基く教育機関ではないため、その運営方針や経営主体は多様であるが、この「小さい学校」については、基本的にそれまで教育機関が扱わなかった低年齢層を対象に開設されたキリスト教組織の管轄下にある学校と定義することができよう。*Dictionnaire historique de l'éducation chrétienne d'expression française* では、は少なからぬページが「小さい学校」のために割かれ、基本的概念として以下のような記述を見ることができる。

「貧困家庭の6、7歳の子供を対象に信仰、キリスト教の道徳、読み、書き、しばしば計算、算数、礼儀作法、女子には家事を教える“小さい学校”は、16世紀、とりわけ17世紀、そして18世紀において発展し続けた…」 「大きな都市では大聖堂の聖歌隊に従属し、あるいは司祭や小教区の共同体や鷹揚な寄付者によって設立され、あるいは施療院や孤児院に関係し、あるいは少年聖歌隊や聖歌隊養成所に結びついている…」 「王権はあまりこれに専心していない。彼は司教たちに、プロテスタントからの新たな改宗者たちを受け入れるために小さな学校を作ってもらおうとした。1698年と1721年に、王は（後に言う）

初等教育義務化の勅令を公布したが、ほとんど全く効果はなかった…¹⁴」

この新しい「学校」に関してアリエスもまた既出の著作において一章を費やし、その特質と教育史的意義を論じている。彼はこの学校の登場の要因を都市の貧民や浮浪者の増大とその解決への人々の関心に帰しているが¹⁵、しかし何にもましてこの学校が有する第一の特質は、これが現在の初等教育にあたる従来学校教育の枠の外にあった年齢層を対象とする教育機関である点であろう。さらにその対象とする階層も、授業料の「無償化」を余儀なくされる貧困階層であり、それ故に教育の目的も彼らの教化とそれによって功を奏すであろう都市の治安の維持にあった。

3) ラ・サールの慈善学校

この「小さい学校」の中でも最も注目されるべき最良の例は、ラ・サール Jean-Baptist de la Salle (1651-1719) による慈善学校であろう。

ランスに生まれた彼は早くから聖職を志し、ランス大司教座に付属する学院 collège des Bons Enfants とランスの大学、さらにパリ大学神学部（ソルボンヌ）で学んだ後、1678 年ランス大聖堂の司祭さらに参事会員の地位に就く。そうした中で彼は、ルーアンとパリの二つの女子修道会 Sœurs de la Providence de Rouen, Sœurs de l'Enfant Jésus – Dames de Sainte-Marie de Paris の創始者であるバレ Nicolas Barré の助言により、ランスの孤児のために 1500 人以上の少女に開放される無償の学校を創設した。その直後、同じくバレの薫陶を受け少年のための慈善学校創設を目指していたニール Adrien Nyel と合流し、彼らの事業が始まるのである。ラ・サールは教育活動のためランスの大聖堂参事会員の禄を辞し、1684 年にキリスト教学校修士会 Frères des Écoles Chétiennes を創設した。

その教育組織・内容は次のような特質を持っている。教師の養成に関して、彼らは 6 ヶ月の研修を受け共同生活を行うことになっていたが、さらに 1685 年には一種の師範学校が設けられる。教師（修士）たちは 1 名の上位者、修練士や新来者の指導者、共同体の指導者といった役職を有す堅固な組織を備え、彼らは毎週教師たちと面会し教育方法、宗教的・司牧的生活への指導、情報交換を行った。彼は多くの著作も残し、授業では静寂な中に秩序を確立し、生徒の進歩を記録簿に残すこと、正確さや規則正しい出席、休日における規則、褒賞と（温和な）矯正、学校の質の維持と均一性、など詳細な教育方法や教育理念を論じている。

とりわけラ・サールの教育で着目される独自性は、「ラテン語」ではなく日常語である「フランス語」の読み・書きを教えたことである。アリエスの著作に見るように、当時の「小さい学校」では、読み・書き学習としてまずは『詩編』や聖歌をテキストとしてラテン語が学ばれるのである。その上で、フランス語で書かれた礼儀作法の読本を学ぶ際に、ようやく一緒に「フランス語」の「読み」が教授された¹⁶。しかしラ・サールは、科目構成としては朗読・習字・算数・キリスト教の教義と実践・歌唱という従来の「小さい学校」の

それに沿ったものでありながら、まず最初に「フランス語」を教授するのである。彼は教育を、既知の事柄から未知の事柄へ、簡単な事柄から複雑な事柄へ、単純なものから複雑なものへと展開させる。これが最終的に子供たちを将来の職業と社会的生活に導く教育の手法なのである¹⁷。

ここから比較すると、過去の教区聖堂付属学校にも見るように、それまでの一般的な「小さい学校」が民衆の教化あるいは聖歌隊の養成のための手法と意図に基いてに運営されていたであろう実情が透けて見えるのである。しかし反対にラサールの組織・体制、教育方法、教育姿勢からは、「無償」という経費面の配慮のみならず教育実践全般において「教育される対象」を優先的に考慮するという「教育」の人道主義的要素が明確に提示されているのであり、ここに彼の教育理念の新しさがある。こうした系統に属する人物として、リヨンで貧困階層のために同じく無償の「小さい学校」を運営した聖職者デミア Charles Demia (1637-1689) の名を挙げておきたい¹⁸。

3. 教育史—革命以前—におけるオベリンの位置付け

1) オベリンの教育における特質

以上、オベリン以前、換言すればフランス革命以前アンシアン・レジーム期までのヨーロッパとりわけフランスにおける教育を概観した。ここで改めてオベリンの教育の特質を再考し、上記の流れのなかで位置づけることを試みてゆきたい。

オベリンは1768年、牧師としてアルザス、バン・ドゥ・ラ・ロッシュ地方ヴァルデルスバッハ教区に着任した。地形・地理・気候そして歴史的にも過酷な状況に置かれていたこの地域は、極度の貧困の中にあった。しかしながら彼を招聘した前任者シュトゥーバー牧師 Jean-Georgs Stuber (1722-1797)¹⁹ も既にこの教区の教育のために少なからぬ努力を払っており、成人のための夜間学校、貸し出し図書館、学校での徹底したフランス語教育という注目すべき事業のいくつかは、オベリンが彼から引き継いだものである。その土台に加えて彼の実践が展開されてゆくわけである。

オベリンの教育の独自性を挙げれるとすれば、その第一は間違いなく幼児教育施設「ポワル・ア・トリコテ」poêle à tricoter（「暖炉の居間」正式名称「編み物学校」）の創設であろう。同機関の設立は1770年、世界初といわれるフレーベル Friedrich Wilhelm August Fröbel (1782-1858) の幼稚園設立（1840年）に70年先行する。教師は全員女性を雇用し、その授業科目はフランス語、地理、自然観察（採取・スケッチ）、礼儀作法と衛生観念および編み物である。その他実物を用いた教材、ゲームを応用した授業、レクリエーション導入、そして3、4歳から6、7歳までの就学前児童の学校教育自体が、当時においては瞠目すべき創案・事業であった。

また制度的側面においては、既に教区に一校開設されていた学校に対する改善とその増設を挙げねばならないであろう。ヴァルデルスバッハ教区は5村2集落を包含していたが、

「学校」が設置されていたのは、ヴェルデルスバッハ 1 村のみであった。時代状況や当時の住民の困窮度合いを推し量れば是非もないが、オベリンは 5 村に各一校の校舎を建設、各々にポワル・ア・トリコテを併設する。このような住民規模・共同体単位に対応した教育施設の設置は、フランスにおいては七月王政下の公教育大臣ギゾー François -Pierre-Guillaume Guizot (1787-1874) による「1833 年 6 月 28 日初等教育法」いわゆるギゾー法を待たねばならない²⁰。さらに同法で規定された教員養成とその待遇改善に関しても、オベリンは先んじて、ポワル・ア・トリコテも含む学校教師たちに定期的な研修、すなわち授業の実践方法や成果報告・模擬授業等を行わせ、待遇についても住居提供や給与などの面において適正な改善をはかった²¹。そして教育義務化に関して、オベリンは共同体行政において一種の教育税を導入して経費面に配慮しつつ、住民に対して 16 歳までの就学義務化を強く要請した²²。

2) オベリンの授業科目

ここでオベリンによって実施された授業の科目を挙げておきたい。これに関しては、ポワル・ア・トリコテの項で触れたが、彼の「学校」において実施された科目を抜粋すると以下のとおりである。

第 1 学年：悪い習慣を捨てる。従順、親切、誠実、秩序、善意など良い習慣を身につける。

アルファベットの小文字を学ぶ。本を見ずに綴る。シラブル、難しい単語を正しく発音する。正しいフランス語で物の名前をいう。

道徳・宗教の基礎。

第 2 学年：習得した知識の復習。進歩。本を見ながら大文字、より難しい単語を覚える。

魂の機能を知る。

時間と季節の概念、植物、動物、人間、栄養…寄付、賃金、貨幣、負債…、役人、政府、福祉…神の力、魂の不死、救い…など。

1000 までを順にまた逆に数える、100 までの足し算。引き算。

第 3 学年：前学年の復習。慣れた本を流暢に読む。小文字をきちんと書く。

10 までの数を様々な配列で書く。足し算・引き算・掛け算・割り算。

(以下略)

基本的な読み・書き・計算・宗教・道徳が含まれ、歌唱も次学年より配置されるオベリンの科目は、全く伝統的な「小さい学校」の科目と一致するが、第 2 学年で社会構造・自然科学にあたる科目が導入されているのは、彼の学校の授業構成の充実を物語っているといえるであろう。

またより進んだ学年では領収書・手形など実践的な職業知識、さらに 15、16 歳という当時の大学入学年齢では、幾何学・天文学、自然科学と人文学の基礎など、大学準備段階と匹敵する科目名が並び、貧困に苦しむ教区にありながらも生徒の最大限の職業選択の可能性に対応しようとする驚くべき尽力を垣間見ることができよう。

3) 同時代の影響—敬虔主義、汎愛派、ペスタロッチ

以上のような極めて近代のかつ斬新な創意に満ちた彼の教育であるが、その直接的背景の一つにはドイツ敬虔主義の影響がある。1648年のウェストファリア条約はアルザスのフランス帰属を認め暫くの小競り合いの後、1679年のナイメーヘン条約でフランス併合が確定した。しかし、むしろこの地方は長らくハプスブルグの支配下にあり、ドイツ系文化の根強い地域であった²⁴。しかもアルザスは、正統ルター派への批判から生まれた敬虔主義運動の端緒となった『敬虔なる願望』*Pia desideria* (1675)の作者シュペーナー Philippe Jacob Spener (1635-1705)の出身地である。彼らは正統ルター派の弾圧を受けたが、ストラスブールにおいても1701年には敬虔主義者たちによる非合法の集会が始まり、ここでも敬虔主義の運動・集会は教会当局によって厳格に禁止された。しかし正統ルター派の排他的厳格さ、教条的指導に反感を抱く人々は少なくなく、オベリンの代父レンプケ Friedrich-Christian Lembke (1689-1785)も、敬虔主義第2世代であるヘルンフートのモラヴィア兄弟団、ツィンツェンドルフ伯 Nicolas Lous ,comte de Zinzendorf (1700-1760)の影響を受けた人物であった。さらにオベリン自身、若き日に敬虔主義者ローレンツ Sigismund Frederic Lorenz (1727-1783)の説教に大変な感銘を受けた様子を書き残している²⁶。

従って彼がこのグループに多大な影響を受け、1778年と1780年にはハレに学園を設立した敬虔主義教育の第一人者フランケ August Hermann Francke (1663-1727)の影響下にあったドイツ敬虔主義者たちの手になる学校の視察に赴いたことに不思議はない。それらの学校のプログラムはおおいにオベリンに示唆を与えたが、それでもなお彼はその授業について、例えば授業時間の長さ、暗記による学習法などに関して批判を下している²⁷。

そしてデッサウで汎愛学舎 *philanthropium* を創設し、直感、労作、遊戯学習という新しい教授法を採用したバゼドウ Johan Bernhardt Basedow (1724-1790)とは、この学舎において教師を勤めたオベリンの弟子シモン Jean Frederic Simon を通じてつながりを持つこととなった。オベリンはシモンの仲介によって、バゼドウの教育実践で採用されている教材を知り、強く影響されたのである²⁸。

古今を通じ最も有名な教育者の一人ペスタロッチ Johann-Heinrich Pestalozzi (1746-1827) — 彼とオベリンは直接の邂逅はなかったが、書簡のやり取りによる交流が知られており、オベリン研究者L・シャルメルは、二人を「コメニウス主義者の二つの極」として幼児教育の観点から論じている²⁹。確かに「全ての人に全てのことを」と主張した“近代教育の父”コメニウス Jan Amos Comenius (1592-1670)は、ヨーロッパ中に大いなる影響を与え³⁰、オベリンもその『世界図絵』*Opus pictus*を学校の教材として第一に挙げている程であった³¹。

こうしたオベリンの同時代者と彼の教育の関係を考察することは不可避のテーマであるが、この主題に関しては稿を改め、本稿では上記の如くその概要を提示するに留めるとし、再び彼オベリンに至るまでの教育の流れに戻りたい。

4) 革命以前の学校教育体制とオベリン

こうして主にフランスにおける学校教育体制の変遷を中世初期から概観し、そこにオベリンの教育を位置づけた結果、彼の教育が極めて近代的で斬新な側面を持つと同時に歴史的教育システムの全く正統な後継者であることを確認することができるのである。

まず、彼が牧師でありながら教区民の教育—とりわけ児童の学校教育—に尽力した業績に関してであるが、教区民の困窮の解消を目的に長期的・持続的対策として「教育」を選んだ彼は、その長期的視野の点で独自である。しかし聖職者が教育を担当するという役割自体は、中世初期に確立して以来のヨーロッパの基本的・伝統的教育システムなのである。

また、彼が設置した科目は、先ずは読み・書き・宗教（キリスト教）・計算・歌唱という伝統的な初等学校「小さい学校」の教科を踏襲している。しかし同時に自然科学・地理・社会構造、商業知識からさらに高度な「自由学芸」に類する科目に至るまでを包摂する。これに関しては、彼の運営する学校が当時としては異例に長期の就学（16歳まで）を要求するものであるが故に、初等学校から大学準備過程である「学院」に手が届くほどのレベルの教科を設置していたということが出来るかもしれない。また商業的知識（簿記、手形等）を教科に含んでいる点は、同じくヨーロッパに存在していた小規模な職業学校を想起させる。してみれば彼の学校は、ポワル・ア・トリコテも含めた場合、大げさに言えば大学以前の全ての年齢、および全てとは言えずともかなり広範な職業選択を視野に入れた極めて大胆な構想の下に開設された教育機関と受け止めることができないであろうか。

あるいは教育理念の新しさの点において、彼と最も多くの共通点を持つ一人がラ・サールである。オベリンのポワル・ア・トリコテも児童の学校も、第一に貧困救済を目的とした施設であった点を見れば、彼とラ・サールの意図は完全に一致することは明白である。また教師の養成・質の維持の対策や教育方法の追究—すなわち「単純なものから複雑なものへ、具体的なものから抽象的なものへ」といった子供の能力や発達を考慮した教授法の基本も、オベリンとラ・サールに共通する要素である。しかし相違点がないわけではない。ラ・サールは孤児たちの学校から始め無償の慈善学校を設立、修道会を設立してからは教師を他の教区の「小さい学校」に派遣するという方式も採用している。これに反しオベリンは基本的に授業料を有償としている。とはいえこのオベリンの有償の制度は、貧しいながらも生徒には両親があり、その教区民たちの狡猾や怠惰に傾く傾向も熟知した上での措置であった。

革命以前の教育体制を俯瞰したとき、最もオベリンの教育理念と実践を想起させるものは、間違いなくラ・サールのそれであろう。その根幹にあるものはキリスト教の慈善の伝統に裏付けられた教育活動であり、それが導くものは教育への専心と「教育を受けるもの」に視点をおいた方法・体制・組織・理念である。現代的に考えればむしろ当然の教育観であるが、では先に見た教育の歴史におけるキリスト教教育機関の「教育」目的は何であったであろうか。それは修道院付属・司教座聖堂付属学校における聖職者養成であり、教師

も学生も大方が聖職者であった大学における学問探求であり、修道会系「学院」における新しい階層の要請に呼応した教養教育であった。ラ・サールやオベリン、ペスタロッチに見る教育観は未だ誕生していない。この比較において、オベリンの理念と実践が、デミアやラ・サール同様新しい教育理念—慈善的・人道的で被教育者中心の視点に基くものであることが明瞭となるであろう。そうした教育が絶対王政の時代に萌芽し、革命の狭間のアルザス、オベリンのもとで結実し、ほぼ同時期にドイツの敬虔主義者や汎愛派の学園として花開く。こうして遠くチェコの戦乱の中で綴られたコメニウスの理念が、ヨーロッパ各地で時満ちて開花するに至るのである。

結語

本稿は、革命以前のヨーロッパ、殊にフランスの学校体制の変遷の流れにおいて、オベリンの教育を把握することを目的とした。無論オベリンの教育には、直接には彼の同時代者との相互的な影響が色濃く反映されている。しかし、古代終焉期から連なるヨーロッパの「学校」「教育」の歴史の中で、時代の要請によって徐々に変化を遂げた「教育理念」が個別の形をとって結晶したのがラ・サールの慈善学校であり、オベリンの幼児教育機関であり、中世の大学でありイエズス会の「学院」であった。またその滔々たる流れの中で、ペスタロッチが、汎愛派の実践が結晶して行く様を俯瞰することによって、その特質はまた違った姿を映し出すてゆくのであろう。

注

- 1 J.F.Oberlin (1740-1826)：フランス、ストラスブールにドイツ系市民の子弟として生まれ、ストラスブール大学で学んだ後、山間のパン・ドゥ・ラ・ロッシュ地方ヴァルデルスバッハ教区に牧師として赴任する。教区民の困窮救済のため、教育をはじめ産業促進等社会事業に尽力する。
- 2 オベリンの教育の制度的な側面と革命以降のフランス教育制度に関しては、拙稿「J.F.Oberlin (オベリン) と教育制度—革命以降のフランス近代教育制度との比較において—」(『桜美林論集』第36号、桜美林大学、2009年)において比較を試みた。
- 3 いずれもローマの貴族階級出身のボエティウスとカッシオドルスは、その著作によって古典古代の学問をヨーロッパ中世に橋渡しした人物として知られているが、彼らは政治的・行政的能力によって東ゴート王テオドリックの宰相として登用された。中世の思想と歴史に関しては上智大学中世思想研究所監修『中世思想原典集成 5 後期ラテン教父』平凡社、1993年、上智大学中世思想研究所監修『中世思想原典集成 6 カロリング・ルネサンス』平凡社、1992年、上智大学中世思想研究所監修『中世思想原典集成 7 前期スコラ学』平凡社、1996年、上智大学中世思想研究所監修『中世思想原典集成 8 シャトルル学派』平凡社、2002年を参照。
- 4 カッシオドルス『要綱』本文については上智大学中世思想研究所『中世思想原典集成 5 後期ラテン教父』平凡社、1993年、329頁—417頁参照。
- 5 Riché P., *Écoles et enseignement dans le Haut Moyen Age fin du Ve siècle—milieu XIe siècle*, 3 ed., Paris, 1999.

- 6 Ibid., p.532.
- 7 Ibid.,p.190.
- 8 Ibid.,pp.162-163.
- 9 Ariès Ph.,*L'Enfant et la vie familiale sous l'Ancien régime*, Paris,1960. p.146.
- 10 Ibid.,p.146.
- 11 collège「学寮」に関してはアリエスが次のようにその起源を記述している。「学寮」は元来、12世紀以降に施療院に設置された貧しい学生のための施設であったが、次第にここで授業が実施されるようになりその後大学の「自由学芸」課程を担当する教育機関へと変化していった。16世紀にはいと大学準備段階の課程を担当するイエズス会運営の collège「学院」が登場する。これは大学からは独立した機関であるが、ラテン語による古典教育を主眼とし、時代の要請によって特に上層市民（ブルジョワ）層に支持され発展していった。
そうした歴史的経緯を踏まえ、ここでは collège に「学寮」「学院」と別の訳を用いている。
- 12 Ibid.,pp.186-187.
- 13 *Dictionnaire historique de l'éducation chrétienne d'expression française*, Paris, 2001.p.136.
オラトリオ会の学院も、フランス国内において 1630 年に 17 校、1700 年には 28 校を数えた。
- 14 Ibid.,pp.514-515.
- 15 Ariès , opus.cit.,pp.338-339.
- 16 Ibid.,p.323.
- 17 ラ・サールに関しては、以下を参照。*Dictionnaire historique de l'éducation chrétienne d'expression française*, Paris, 2001.pp.372-374.
- 18 デミアに関しては、前掲書 175-176 頁を参照。
- 19 シュトゥーバーに関しては以下を参照。
Baum J.W., *Johann Georg Stuber*, Strasbourg,1998.
- 20 フランス革命以来の宿願であった公教育制度の確立は、このギゾー法でようやく一応の法制化を見る。共同体単位の教育施設設置に関しては、次のように定められた。「全ての市町村は単独で、もしくは隣接する複数の市町村と連合して、最低一校の尋常小学校を運営しなければならない。」（同法、第3章第9条）「県内の県庁所在地、および人口が6000人を超える市は、前上の他に、高等小学校を設置しなければならない。」（同、第11条）
- 21 教員養成に関する同法は以下のとおり。「すべての県は単独で、もしくは隣接する1ないし複数の県と連合して、初等師範学校を運営しなければならない。」（同第11条）、「すべての市町村立小学校教員には次のものが提供される。1、教員の住居としてのみならず、生徒を受け入れる場所としても用いることのできる家屋。2、固定給。尋常小学校では200フランを、高等小学校では400フランを、それぞれ下回ることはいできない。」
- 22 教育義務化はさらに時代が下り、第三共和政の公教育大臣フェリー Jules Ferry (1832-1893) による1882年3月6日教育法に至って、ようやく満6歳から13歳までの男女に初等教育を受けさせることを義務化した。以上、フランス革命以降の公教育制度に関しては、拙稿、「J.F.Oberlin（オベリン）と教育制度—革命以降の近代教育制度との比較において—」（『桜美林論集』第36号、2009）を参照。
- 23 Kurtz J.W., *John Frederic Oberlin*, Colorado,1976.pp.291-293.
- 24 アルザスの歴史に関しては、市村卓彦『アルザス文化史』人文書院、2002年、を参照。
- 25 Chalmel L., *Oberlin, Le pasteur des Lumières*, Strasbourg,2003,pp.25-26.
- 26 Chalmel L., *Le pasteur Obirlin*, Paris ,1999. pp.52-53.
- 27 Chalmel,opus.cit., pp.98-101.
- 28 Chalmel,opus.cit.,pp.36-37.
- 29 Chalmel L.,J.F.Oberlin et J.H.Pestalozzi:deux pôles de l'alternative coménienne à l'éducation préscolaire (Samuel-Scheyder M., Alexandre Ph., eds. *Pensée Pédagogique*, Bern,1999.)
- 30 コメニウスについては以下を参照。

コメニウス / 鈴木秀勇訳『大教授学 1』明治図書、1962 年。
コメニウス / 鈴木秀勇訳『大教授学 2』明治図書、1976 年。
井ノ口淳三『コメニウス教育学の研究』ミネルヴァ書房、1998 年。

31 Chalmel,opus.cit.,p.103.

<参考文献>

J.F. オベリン

Kurtz J.W., *John Frederic Oberlin*,Colorado,1976.
(J.W. カーツ / 柳原鐵太郎訳『ジャン＝フレデリック・オベリンーアルザスの土を耕し心を育んだ生涯』桜美林学園、2006 年。)
Chalmel L., *Oberlin, Le pasteur des Lumières*,Strasbourg,2003.
Chalmel L., *Le pasteur Obirlin*,Paris,1999.
Leenhardt C., *La vie de J.-F.Oberlin*,Toulouse,1914.
Samuel-Scheyder M., Alexandre Ph.,(eds.) *Pensée Pédagogique*,Bern,1999.
Baum J.W., *Johann Georg Stuber*,Strasbourg,1998.
市村卓彦『アルザス文化史』人文書院、2002 年。

中世の学校・教育

Riché P., *Écoles et enseignement dans le Haut Moyen Age fin du V^e siècle – milieu X^e siècle*,3 ed.,Paris,1999.
上智大学中世思想研究所監修『中世思想原典集成 5 後期ラテン教父』平凡社、1993 年。
上智大学中世思想研究所監修『中世思想原典集成 6 カロリング・ルネサンス』平凡社、1992 年。
上智大学中世思想研究所監修『中世思想原典集成 7 前期スコラ学』平凡社、1996 年。
上智大学中世思想研究所監修『中世思想原典集成 8 シャルトル学派』平凡社、2002 年。

16 世紀以降の教育

Dictionaire historique de l'éducation chrétienne d'exprssion française, Paris, 2001.
Aries Ph.,*L'Enfant et la vie familiale sous l'Ancien regime*, Paris,1960.
Maurepas A.de ,Brayard F., *Les Français vus par eux-même le X V^{III}^esiècle*,Paris 1996.
コメニウス / 鈴木秀勇訳『大教授学 1』明治図書、1962 年。
コメニウス / 鈴木秀勇訳『大教授学 2』明治図書、1976 年。
井ノ口淳三『コメニウス教育学の研究』ミネルヴァ書房、1998 年。